

鳶工 荻野公一

「鳶職」の語源は、梁から梁へと「跳び」回る様子からとも、丸太などの木材を取り扱う道具「鳶口」から来ているとも言われる。往年は現場の花形としてあこがれの職業とも言われたが、工事全体をくまなく見渡しながら他職のサポートに徹する「裏方」としての役割も強くなってきている。

「てっとり早く稼ぐため」鳶職に

新潟出身の鳶工・荻野公一は、地元の高校を卒業後、名古屋に出て自動車整備工、ディーラー勤務などを経る中で「ちょっと横道に逸れて、まとまったお金が必要になった」。そこでとにかくすぐに高額収入を得られる職に…という動機で二〇歳そこそで上京し、鳶工になった。もちろん、建築関係の仕事は全くの未経験だった。「自動車関係で食べていくつもりだったんですけど、波乱が起きまして(笑)。肉体労働で一番稼げるのは鳶工だって聞いて、募集広告を見て飛び込んだのが、今の会社です」
それからおよそ二〇年、都内を中心に大きな

現場をいくつも経験し、今は二〇人から三〇人の職人を束ねる職長の立場にある。

昔ながらの職人だった先輩たち

「鉄骨建方と、足場の組立。だいたいこの二つが鳶工の作業なんですけど…最初は辞めたくてしようがなかった。朝は行きたくないし、早く帰りたいし(笑)。そもそも、我々の時代は先輩から仕事を教わるっていうことがまずできなかった。技は見えて盗むしかない。私がそういう世代の最後かも知れないですね」

「とはいえ、わからないことは聞くしかない。納得できないことや理由がわからないことはやりたくない性分なので、『うるせえ』とか言われながらもしつこいくらい聞いて回ってました」
当時の先輩たちは、荻野より一回り以上年上のいわゆる昔気質の職人。指示を出すのにいちいち説明などしないし、効率のよい方法を懇切丁寧に教えてくれるわけでもない。
「先輩たちは、安全なんか全然気にしてないかのように飄々と仕事を進めるんですけど、危ないことをした時はものすごく怒られるんです



左/現場は鉄骨造と鉄筋コンクリート造の混構造。鉄骨建方の仕事は少ないが、複雑に入り組んだ現場内の足場を組むなど鳶工の持ち場は多い。
中/広い現場の中央付近にタワークレーンが立つ。タワークレーンの設置・解体も鳶工の役目だ。
右/大林組・坂田主任と荻野。「段取り・手配は私たちゼネコンがしますが、最前線で働いているのは職人さん。彼らの仕事の流れから学ぶ部分は多いです」

KEEP

守り、伝えること

昔ながらの職人たちから学んだことが、
今の立場になるとよくわかる



現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

よ。そうやってガミガミ言われた理由が、自分が一線に出て初めてわかったりして。そういう人たちはだいたい引退したけどさびしいですよね」
「体ができるまで、一年くらいは毎日くたくたでした。食べる量も倍くらいになって…。

そのころって、これでもかかっていうくらい力仕事ばかりやらされるんですよ。重いもの運ばされて文句言ってましたけど、今思えばそれが鳶の体づくりになっていたんだな、と。力がないと、一緒に働いてる人にも迷惑かけますからね」

全体の中の「自分たちの仕事」を見出す

嫌々だった仕事も、作業の流れがわかってくるとやりがいを感じるようになっていった。
「鳶工に限らず、自分の前後や全体の仕事をわかってないと確かな仕事にならないですよ。自分たちが言われたことだけやって満足してたらただの独りよがり。前の仕事から引き継いで、次の仕事のこともしっかり考えて作業する。そういうことをイメージしてできるようにになったら、楽しくなってきたんです」

鉄骨建方など、躯体の高層部と地上に分かれて作業する場合、上を「取り付け」、下を「地走り」と呼ぶ。ある程度「取り付け」の経験を積んだら、より高度な段取りが必要な「地走り」を担当するというのが鳶工の通例だ。無数にある部材・資材を限られたヤードのどこに仮置きし、どの順番で上層階に吊り上げるかを全て自分で考え、準備し、指示しなければならない。

「初めて地走りをやった時…品川のオフィスビルでしたけど、手探り状態の中でも、上（取り付け）をやっていたから求めていることがわかって、何とかうまくいったんですよ。それでその時に、上も下もできて初めて本場の鳶工だということに気づいて、『自分が現場を動かしている』という充実感がすごく得られたんです」

いい職人には「せっかちが多い」？

「自分も含め、職人って『せっかち』が多いと思うんです。せっかちな人っていうのは、物事を合理的に効率よく進めたいんですよ」

大学のキャンパス建設現場で荻野と共に働く大林組・坂田高洋主任は、

「確かに職人さんたちは、我々ゼネコンにも素早い決定・判断を求めています。でも荻野さんの場合、ただ一方的な要求じゃなくて、効率や目的を踏まえて、筋道を立てた要望なんです」と、実感を込めた。

「我々の仕事のほとんどは仮設物だから、最終的には残らない。つまり絶対的な正解がないんです。やる気と体の元気さえあれば誰にでもチャンスがある業界だと思います」



左／工程を決めるのはゼネコンだが、その中の細かい手順・重機のやりくり・資材の搬入スケジュールなどは鳶工に一任される。当然、現場での確認も重要だ。
右／足場の上るための階段の設置。他職も含めすべての作業員が安全に効率よく働くための環境・職場づくりを一手に引き受ける。



おぎのこういち◎1970(昭和45)年、新潟県生まれ。地元の工業高校卒業後、自動車整備工などを経て上京し、山岡建設工業に入社。鳶工として、東京駅・ソラマチなど数多くの現場を経験、平成25年度大林組スーパー職長認定。現在勤務する(仮称)帝京大学八王子キャンパス新校舎棟新築工事では職長会の会長も務める。

CHANGE

応じ、変えること

「鳶工は、自分がビルを建てているという
実感を一番得られる仕事」